

千曲川ダム 絵田中勝太郎

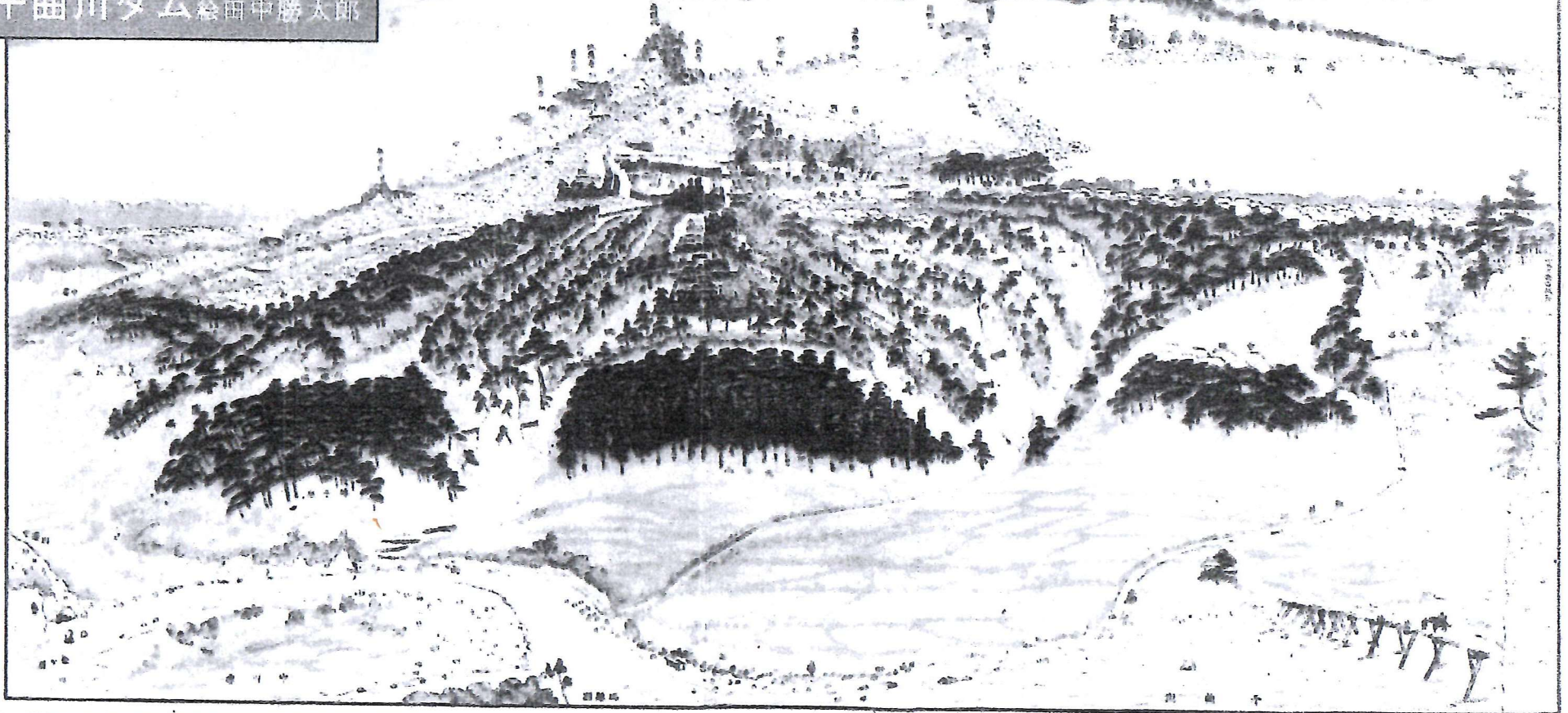
小諸城址繪圖

備考

小諸城址は、武蔵上野原
 平野に、徳川時代、諸將の
 居城として築かれた。城址は、水
 洞とて、今も、城址の遺蹟を
 示す。此城址は、上野原に
 あり、本城址は、所在ノ不明なり
 島田、徳川、二つ鳥取の密林
 丘地起、此城址の遺蹟を、持
 ち、通稱して、小諸城とす。
 是れ、二つの城址の、所在ノ
 異なる、事なり。是れを、考
 證する、ハ、ムコトナリ。

絵と歌で綴る 小諸の江戸・明治・大正

小諸唱歌



絵と歌で綴る

小諸の明治・大正

小諸

唱歌

作歌

池田芦舟

星野香山合作

作曲

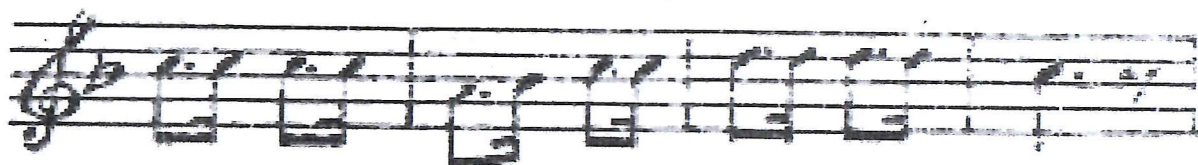
長尾亥三太



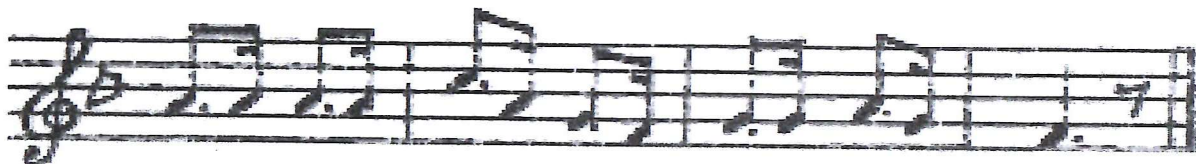
イザサー トモダチ トモダチ ニ



トガマキ マチヲー とがし



ニシマタ ミナミー キタノク マ



サンポー ナガラニ メグリミ シ

明治38年に作歌・作曲・大正15年改正・追加作

小諸唱歌楽譜目次 (明治38年・大正一五年作詞の比較)

- 浅間山・千曲川・小諸町
- ① 1 いざ友^{とも}どち共^{ともども}々に 我^{わが}町^{まち}々^{まち}を 東^{ひがし}より 西^{にし}また 南^{みな}北^{きた}のくま 散^{さん}歩^ぽながらに 巡^{めぐり}り見^みん
- ② 2 煙^{けむり}は高^{たか}し浅^{あさ} 間^ま山^{やま} 流^{なが}れは清^{きよ}し千^{ちく}曲^{まがわ}川^{がわ} この江^{こう}山^{ざん}の間^{あひ}にある 町^{まち}は即^{すなわ}ち小^こ諸^{しよ}町^{ちやう}
- ③ 3 人口^{じんこう}1万^よ3千^こ余^{すう} 戸^と数^{すう}は二^に千^{せん}と三^{さん}・四^よ百^{ひゃく} 東^{とう}西^{ざい}凡^おそ一^い里^{ちり}半^{はん} 南^{なん}北^{ぼく}四十^{しじゅう}と五^ご丁^{ちやう}あり
- 3 人口^{じんこう}八^{はち}千^{せん}又^{また}五^ご百^{ひゃく} 戸^と数^{すう}は一^{いち}千^{せん}五^ご百^{ひゃく}余^{すう}戸^と 東^{とう}西^{ざい}凡^おそ一^い里^{ちり}半^{はん} 南^{なん}北^{ぼく}四十^{しじゅう}と五^ご丁^{ちやう}あり
- 乙女橋・山の前・諸山
- 四 春^はは弥^や生^{よい}の乙^{おと}女^{めばし}橋^{はし} 橋^{わた}を渡^{わた}れば山^{やま}の前^{まえ} 北^{きた}に 峙^{そば}諸^{だつ}山^{もる}は月^づの名^な所^{ところ}にあるぞかし
- 4 春^はは弥^や生^{よい}の乙^{おと}女^{めばし}町^{ちやう} 真^ま向^{むか}に見^みゆるは山^{やま}の前^{まえ} 諸^{しよ}山^{ざん}糠^{ぬか}塚^{づか}一^{いち}里^りづか 其^{その}古^こ事^じを操^{そう}矢^や川^{がわ}
- 水棚・粟島社
- 五 山^{した}の下^{した}なる水^{みづ}棚^{たな}の 池^{いけ}の隔^{へだ}てし粟^{あわ}島^{しま}は 安^{あん}産^{ざん}の守^こ護^{つてり}の神^{かみ}なりと 婦^ふ人^{じん}の参^{さん}詣^{げい}稀^{まれ}ならず
- 糠塚・操矢川・亀澤
- 六 勸^{かん}人^{じん}長^{ちやう}者^{じや}や糠^{ぬか}塚^{づか}の 其^{その}古^{ふる}事^{こと}を操^{くり}矢^や川^{がわ} 巖^{いわ}にもかたき亀^{かめ}澤^{ざわ}に 出^いづる亀^{かめ}石^{いし}珍^{めづ}しき
- 唐松
- 七 八^{はち}町^{ちやう}有^あ余^りの松^{まつ}並^{なみ}木^き 夏^かは涼^{すず}しき風^{かぜ}越^{おこ}り 疲^{つか}れし旅^{たび}人^{びと}を慰^{なぐさ}めし 其^{その}唐^{から}松^{まつ}は名^なのみにて
- 5 今^{いま}は松^{まつ}なき唐^{から}松^{まつ}も ほのぼの明^あるく曙^{あけぼ}の 空^{から}飛^とぶ鳥^{とり}の三^{さん}四^し五^ご羽^う 又^{また}一^{ひと}人^{しお}の眺^{なが}めなり
- 八 今^{いま}は立^たち寄^よる蔭^{かげ}もなく 人^{じん}家^かや畑^{はたけ}と変^{かは}りたり 此^{こゝ}処^{ところ}に四^し十^{じゅう}八^{はち} ありしも嘗^{かつ}て發^あ堀^ぼかれぬ
- 加増稲荷
- 九 赤^{あか}き鳥^{とり}居^いは其^{その}のむかし 加^か増^{ます}の為^{ため}に藩^{けん}公^{こう}の勸^{かん}請^{じやう}せられし社^{しゃ}として 加^か増^{ます}稲^い荷^{なり}と人^{ひと}は呼^よぶ
- 一〇 残^{のこ}れる松^{まつ}の下^{した}蔭^{かげ}に 見^みゆる社^{やしろ}はかしこくも 過^すぐる明^{めい}治^じ十^{じゅう}一^{いち}年^{ねん}時^{とき}の帝^{みかど}の御^み車^{くるま}を

6 十一年の御巡幸 かたじけなくも御車を とどめ給ひし御あとの 記念の宮は中ほどぞ

御幸町 一一 駐^{とど}め給^{たま}ひし御^{おん}跡^{あと}の為^{ため}の御^み幸^{ゆき}町^{ちやう} ここを^と通^あつて荒^あ掘^らりの左^{ひだり}に岐^まれ二^{ふた}里^り行^いけば

塩名田・枇杷橋 一二 鯀^{かじか}の名^{めい}所^{しよ}塩^{しよ}名^な田^だぞ 往^ゆき乗^まに自^じ動^{どう}車^{しゃ}・俵^{くま}あり 枇^び杷^わ橋^し過^すぎて枇^び杷^わ峠^げ 座^ざ頭^{とう}ころがしここなるよ

小原 一三 西^{にし}の方^{かた}なる小^こ原^{はら}区^くは 人^{じん}家^かの数^{かず}も百^{ひゃく}余^よ軒^{けん} 塩^{しよ}川^{がわ}城^{じやう}のありし跡^{あと} 白^{しろ}く見^みゆるは製^{せい}糸^{しよ}場^ば

7 忽^{たちま}ち来^ある荒^あ堀^{ほり}の 南^{みなみ}は小^こ原^{はら}区^く朝^あ烟^{えん}り たてる人^{ひと}家^かは百^{ひゃく}ばかり 分^{ぶん}教^{きやう}場^{ばう}も置^おかれたり

湯の瀬温泉・明神池 一四 湯^ゆの瀬^せの温^{おん}泉^{せん}訪^{おと}づれて 谷^{たに}の落^おち来^くる滝^{たき}眺^{なが}め 明^み神^{じん}池^{いけ}で釣^つりせんは やがててのひまに讓^{ゆづ}るなり

六道原・味噌塚 一五 六^{ろく}道^{どう}原^{はら}の六^{ろく}地^じ蔵^{ざう} これには口^{くち}碑^ひのあるとかや 鉄^{てつ}道^{どう}線^{せん}路^ろの北^{きた}にある 其^{その}名^なも高^{たか}き 味^み噌^{そう}塚^{づか}は

一六 土^{つち}に点^{てん}火^かありし時^{とき} その火^あは雨^{あめ}の降^ふるまでは 消^きえぬと云^いふを学^{がく}者^{しゃ}達^{たち} 研^{けん}究^{きゆう}資^し料^{りやう}としたりたり

一七 坂^{さか}を登^{のぼ}りし一^ひと町^{まち}は 小^こ諸^{もろ}の町^{まち}にあらねども 古^こ来^{らい}工^{こう}業^{ぎやう}発^は展^{てん}し 履^{はき}物^{もの}類^{るい}の産^{さん}地^ちぞや

蛇堀橋・蛇堀川 一八 静^{しず}かに渡^{わた}る蛇^{じゃ}堀^{ぼり}橋^{ばし} 川^{がわ}は名^なに負^おふ蛇^{じゃ}堀^{ぼり}川^{がわ} 大^{だい}蛇^{じや}のほりしと伝^{つた}ふるは 昔^{むかし}のひとの言^{こと}の葉^はぞ

8 向^{むか}う彼^か方^はは蛇^{じゃ}堀^{ぼり}橋^{ばし} 川^{がわ}は名^なに負^おふ蛇^{じゃ}堀^{ぼり}川^{がわ} 大^{だい}蛇^{じや}のほりしと伝^{つた}ふるは 昔^{むかし}の人の言^{こと}の葉^はぞ

与良町 一九 さて入^いり来^{きた}る与^よ良^らの町^{まち} 行^いきか^う人^{ひと}のいと繁^{しげ}く 軒^{のき}を並^{なら}べし商^{しやう}店^{てん}は競^{きそ}うて業^{ぎやう}にいそしみぬ

9 橋^{はし}を渡^{わた}れば与^よ良^らの町^{まち} 行^いきか^ふ人^{ひと}もいと繁^{しげ}く 軒^{のき}を並^{なら}べし商^{しやう}店^{てん}に 土^{はし}地^ちの繁^は栄^{えい}ぞ知^しらしける

下河原・駒形神社・寄木稻荷 二〇 左^{ひだり}に降^{くだ}りて拾^よ〇^ら町^{まち}与^よ良^らの旧^こ地^ちの下^{した}河^{がわ}原^{はら} 古^こ城^{じやう}の跡^{あと}や駒^{こま}形^{がた}社^{しゃ} 寄^よ木^き稻^い荷^{なり}も其^{その}隣^{とな}り

長勝寺・熊野小路・薬師小路・鶴巻町 二一 町^{まち}の東^{ひがし}の) 長^{ちやう}勝^{しやう}寺^じ 其^よ横^{こがわ}側^{くまのみち}に熊^{やく}野^し道^{どう} 薬^{やく}師^し小^{こう}路^じを^とりぬけ 西^{にし}へ向^{むか}へば鶴^{つる}巻^{まき}町^{ちやう}

10 左に行けばしんめいしゃ神明社 右に大日だいにとちこうじ小路あり 町の半にななかば ちょうしょうじ長勝寺 その横側はよこがわ みち熊野路

二二 活動館かつどうかんや料理店りょうりてん 夜の繁華よる はんかの新開地しんかいち 朝はとくよう賑あさわえし 製糸場せいしじょうへの女工じょこうたち

荒町 二三 進むすす荒町本通りあらかまちほんどう 赤坂あかさかの其間そのあいだ 古ふるくは垂井たるいと称とえしが 今いまは商業盛しょうぎょうさかんの地

11 つゞく荒町本通り 左に下れば赤坂の 一二三番かず数町の 数えておかん後のため

赤坂町 二四 横よこに下れば赤坂あかさかぞ 上かみ下しも一二三番 町 会社かいしゃ・工場こうじょう・小売店こうりてん 演劇場えんげきじょうも建たてられて

南町・東町 二五 きかのふに変わる 今日きょうの様さま げおどろに驚おどろくは世よの進しん歩ぽ 此この地ちの南みなみは南町みなみちよう 東ひがしにある東町ひがしちよう

二六 皆近頃みなちかごろに殖ふえしまち 停車場ていしゃじょうへは間近まぢかにて 何れいづの家いえも新あたしく 木きの香かの匂におうころよさ

二七 山浦道やまうらみちのこなたには 煙硝蔵えんしょうくらの跡あと古ふるく 目出度めでたき万歳街まんざいかい道どうや 大黒穴だいこくあなもこのほとり

八幡小路・八幡神社 二八 元来もとまた道みちを引返ひきかへしし 八幡小路やっぺんこうじを登のぼりつめ 仰あやげば森もりはおごそかに 由緒よしゆ尊とんき弓矢神きうしあ

12 元来し町へ出でくれば ぬ手たは八幡小路なり 八幡神社の祭典は 毎年九月一日ぞ

二九 城しろの鎮しづめと秀久ひでひさが あがめ祀まつりし社やしろあり 毎年九月祭典まいとし さいてんの 相撲すもうは世間せけんに知しられたり

高等女学校 三〇 東隣ひがしとなりの建物たてもは 県立高等女学校けんりつこうとうじょがっこう 生徒せいとの数かずも年としに増まし 五年制度せいどの卒先そっせんぞ

浅間山 三一 ここより東ひがしへ三里さんりにて 世よに著名ちよめいなる浅間山あさまやま 活火かつわの山嶺やまみねの風景ふうけいは 神かみニ鬼作きさくの妙趣みょうしゆあり

熊野神社 三二 熊野くまのの宮みやは伊邪那美いざなみの神かみを祭まつれる町社ちようしゃなり 夏なつは木陰こかげに集つどいい来て 暑あつさを避さぐる人多ひとおほし

13 熊野の森は伊邪那美の 神を祭れる町社なり 夏は涼しき木下陰 暑さを避くる人多し

全宗寺 三三 再び出づる町の中 全宗寺をば通り過ぎ 左に入れば旭町 小学校への通学路

15 再び出づる町通り かなたにあるは全宗寺 六十三の銀行は 下りて左の方にあり

紺屋町 三四 其又右は紺屋町 製材工場音絶えず 蚕種会社や製糸場 並びに電気の変電所

16 右は山道細小路 深く入りなば紺屋町 往き来の人足しげき 北山里の通りぞや

第二小学校・水道町・貯水池 三五 彼方の大なる建物は 第二の小諸小学校 つづいて長き水道町 上にあるのは貯水池ぞ

太郎山 三六 北に見ゆるは太郎山 遠き昔は城砦まで 甲越時代は狼煙台 今は松をば植え付けぬ

14 北に見ゆるは太郎山 麓の家は五六十 松井 軽石 東沢 皆山里の眺めよし

三七 この頂に登りなば 心も広く気は伸びて 日本アルプス・八ヶ岳 佐久の平も一と眺め

松井・軽石・東沢 三八 麓の農家五六十 松井・軽石・東沢 東南にちらばりて 皆山里の景色よし

海応院 三九 商家の並ぶ其奥に 曹洞宗の海応院 臺も高く輝きて 昔ながらの巨利なり

17 商家の並ぶその奥に 海応院や宗心寺 堂宇は高く庭広く 樹木は多く池清し

宗心寺 四〇 西に接する宗心寺 是れ又古き禅寺なり 表の町は繁華にて 店頭百貨を陳ねたり

六三銀行・相生町 四一 六三銀行左はし 僅か下れば相生町 停車場への通りまで 往き来の人足繁し

18 小諸郵便電信の 局この前をばはや過ぎて 行けば左に^{ステーション}停車場 相生町の通るなり

光岳寺 四二 ^{あらまちす みぎ ほう じょうどしゅう こうがくじ どうしゅうさく ふ がしら こすぎたか そら} 荒町過ぎて右の方 浄土宗なる光岳寺 同宗佐久の触れ頭 古杉高く空をつき

19 荒町出で、右見れば 浄土宗なる光岳寺 二つの門を前にして 棟高々と聳えけり

四三 ^{がど そび さんもん じゅうろくらかん そんち もん しゅうろう にり あまり ひど きょしゅう} 峨々と聳ゆる山門に 十六羅漢の存置あり 門の左の鐘楼は 二里の余に響く巨鐘なり

成田山 四四 ^{さんないなりた ふどうそん れいけん まいつき よる ひとで おびたし} 山内成田の不動尊 壺頭いともあらたかに 毎月二十七日の夜の人は 夥し

20 寺のひだりは成田山 梅や桜は滝つぼに 散り込む春の花吹雪 又なつかしの風情かな

21 博愛館はすぐ前ぞ いざや登りて眺めなん 遠き山々近き川 村里までも一目なり

本町 四五 ^{たちいでほんまち むか まち まっすぐ なら しょうか はんじょう いりくる} ここを立出で本町へ 向へば町は真直に 並ぶ商家の繁昌は 入り来る人の目につけり

22 こゝを立出で本町に 向えば町は真直に 軒を並べし商業家 入り来る人の賑はしや

六供町 四六 ^{みぎ のぼ ゆ ろっく にぎ のき きゅうどうちやや はた ひと とほ た} 右に登り行く 六供の町の賑はしさ 軒の球燈茶屋の旗 人の通り絶えもなし

23 少し進みて小路あり 六供の町のいと長く 上りつめれば成就寺 一本桜の名はたかし

24 手前にあるは第二号 純水館の製糸場 機械の音をよそにして 元来し道に帰り来ぬ

成就寺 四七 ^{あ っ じょうじゅうじ あいおいまつ な たか ひ もと ふる こずえ はなき} 上がり詰めれば成就寺 相生松の名も高く 一と本桜は古びたり されど梢に花咲けり

無縁堂・大井道見墓 四八 ^{きた かた むえんどう はたけ まなか こりつ ふる き そのほか どうみん いせき} 北の方ふる無縁堂 畑の真中に孤立せる 古き一基の其墓は 道見大井の遺跡とぞ

菱野薬師道・丸純製糸場 四九 ^{きた あが みちすじ ひしの やくし ほんどお まえ まるじゅんせいしじょう た うんてんざかん} 北に上る道筋は 菱野薬師の本通り 前は丸純製糸場 絶へず運轉盛なる

向う六供 五〇 ^{きかい おと よそ しみずか のど うるを} 機械の音を余所にして 向う六供の清水呑み かわける喉を潤して 元の道へと帰り来ぬ

小諸銀行・馬場裏町・町役場 五一 ^{こもろぎんこうみぎ み くだ ひだり いりぐち ば ばうらちょう どうり まちやくば} 小諸銀行右に見て 下る左の入口は 馬場裏町への通路にて 前に見ゆるは町役場

25 小諸銀行右にみて 下れば町のなかばなる 左に立てし里程標 何処の距離も明かぞ

57 馬場裏町を登りたる 南にあるは町役場 機業会社も音高く 国家の富を織り出しぬ

里程標 (五二) 町の中央の里程標 何処の距離も明かぞ 飾る店頭眺めつつ 忽ち来る四つ辻の

警察署 (五三) 向うにあるは警察署 門標高く厳めしく 特別この署内には 観測所の電話あり

26 足を早めて四辻に 進む向は警察署 籠高く厳めしく 電話線も架けられぬ

中町・瓦門・大手町 (五四) 右は中町 左には 昔の儘の瓦門 大手の口に休らひて いざや道おぼかえてみん

(27) 右は中町左には 昔のまゝの瓦門 大手の口に休らひて いざや道おぼかへてみん

田町・喜多町・常盤町 (五五) 北お歩めば菜の花の 咲いてゆかしき田町裏 近頃開きし道二つ 其名は喜多町・常盤町

(28) 北に下がれば菜の花の 咲きて床しき田町裏 菱野薬師や大里の 金比羅山には程近し

小諸商業学校 (五六) 家も殖えたり此処彼処 人も増したり昨日今日 向こうの鉄筋建築は 県立小諸商業学校

(五七) 収容生徒五百名 徴兵猶予の認可あり 運動場や寄宿舍の設備も総て整へり

滝原道・山根製糸場 (五八) 滝原道の左には 煙突高く天を突き 運搬車のはげしさは これぞ山根の製糸場

菱野鉱泉場 五九 北に登らば一里にて 菱野薬師の鉱泉場 避暑の適地と世に知られ 四時の浴客いと多し

丸山・宮の窪・金毘羅・飯綱山 (六〇) 石器の出でし丸山も 一本松の宮の窪も 皆此道の附近にて 金毘羅・飯綱程近し

布引鉄道 六一 小高き岡より見渡せば 臥龍の如く西南に 長く伸びし布引の 工事中なる鉄道ぞ

實大寺・尊立寺・健速神社 六二 鶯 唄ふ法華經の寺は實大寺・尊立寺 健速神社は森高く 登る石段幾階ぞ

29 うぐいすうたふ法華経 寺は実大、尊立寺 健速神社は森高く 彼方に見ゆるは托応寺

祇園祭典・応興寺

六三 毎年七月十三日 世に知れ渡る神輿練り 小諸祇園の社なり 森の彼方は応興寺

養蓮寺

六四 戻りて出づる中町の 向こうの角には養蓮寺 一向宗の古き寺 宝物類もありとかや

30 戻りて出づる中町の 向こふの角には養蓮寺 前は裏町長通り 製油会社もありときく

六五 土佐の光起画きたる 親鸞上人一代記 国實今に存すれば 請うて一覽するもよし

御園町・裏町

六六 寺の東の新道は 昔忘れぬ御園町 前は裏町長通り 澤を越ゆれば新町よ

横町・鍋蓋城（高屋敷）

六七 31 横町通る弓手には 石垣高く松の枝の 風にむせぶは 古の鍋蓋城の跡ぞかし

市町

六八 32 右に曲りて市町の 半に來れば橋の下 おどろおどろと 鳴り響き 汽車は煙を吐きて行く

閻魔堂・稻荷社

六九 下る真向は閻魔堂 今は何処に移しけん 桃に桜に咲き匂ふ 稻荷の園となりにけり

33 目先にあるは閻魔堂 今は何処にうつしけん 桃に桜に咲き匂ふ 稻荷の園となりにけり

天王神・天王町

七〇 南に開きし新道は天王神の前なれば 天王町と名をつけて足柄町への通りなり

柳町

七一 又古の北の崖下は 藁屋瓦屋静かにて 清水えをくつる青柳 糸を因める柳町

中澤橋

七二 行くや中澤橋凄く 谷底深く薄暗し 古来の橋 我が町の 三大橋の一となす

34 清き流れにさす影の 柳町をば左に見 行けば中沢橋凄く 谷底深くうす暗し

新町・片側町

七三 進む新町東口 ここは人家も右のみか 片側町とよびなしぬ 下がれば町は平なり

35 入るや新町東口 ここは人家も右のみか 片側町と人は呼ぶ 下れば町も平らなり

- 七四 商工^{しょうこうはげ}励^{せいたん}みて西^{はんか}端^{かさ}の 繁華^{いこは}を今^{やしろ}に支^{ひる}へたり いざ憩^{たべ}はなんあ^{こかげ}の社 昼も食^{たべ}なんあ^{こかげ}の木陰
- 36 左右に並ぶ商店は 西の端なる繁華ぞや いざ憩^{いこ}はなんあ^{いこ}の社 ひるも食^{たべ}べなんあ^{いこ}の木陰
- 青木神社 七五 37 青木^{あおき}の宮^{みや}に頼^{ぬかづ}きて かたへの石^{いし}に友^{とも}どちと 暫^{しば}し疲^{つか}れを休^{やす}らひて 又^{また}共^{とも}々に立^たち出^いでぬ
- 栃木川・手城塚・手城塚稲荷 七六 38 水^{みず}も逆^{さか}巻^まく栃木川^{とちぎがわ} 橋^{はし}を渡^{わた}りて五六^{ごろくちよう}町 左^{ひだり}に行^ゆけば手城塚^{てしるづか} 稲荷^{いなり}の神^{かみ}の社^{やしろ}あり
- 七七 39 昔^{むかし}武^ぶ将^{しょう}の城^{じやう}の跡^{あと} 四方^{よも}の眺^{ながめ}めも廣^{ひろ}やかに 春^{はる}の朝^{あした}は 花^{はな}によく 秋^{あき}の夕^{ゆふ}べは月^{つき}によし
- 富士見坂・花川・布引 七八 40 あれに見^みゆるは富士見坂^{ふじみざか} 螢^{ほたる}の名^{めい}所^{じよ}の花^{はな}川^{かわ}も 紅葉^{もみじ}に名^な高^{たか}き布^{ぬの}引^ひも 袂^{たもと}の中^{なか}のものにこそ
- 押し出し 七九 41 秋^{あき}の夜^よならば聞^ききてみん この塚^{つか}山^{やま}の西^{にし}にある 古^こ来^{らい}名^なを得^えし押^おし出^だの 池^{いけ}の水^{みづ}際^{ぎわ}の虫^{むし}の音^ねを
- 大梁 八〇 42 いざや帰^{かえ}り は友^{とも}どちよ別^{べつ}なる道^{みち}を取^とるとせん 大梁^{おおあぐだ}下^{くだ}りて九十九^{つづら}折^{おり} 坂^{さか}を登^{のぼ}れば高^{たか}き場^{ばしよ}所
- 大久保 八一 ここに佇^{たた}ずみ見^み返^かへれば 川^{かわ}辺^べは低^{ひく}し大久保^{おおくぼ}の 遥^{はる}かに白^{しろ}き橋^{はし}の上^{うへ} 寸^{すん}馬^ば豆^{とう}人^{じん}追^{おい}々に
- 八二 川^{かわ}原^{はら}の松^{まつ}にかくれ行^いく 又^{また}一人^{ひとり}の風^{ふう}趣^{しゆ}あり 右^{みぎ}は大^{おお}平^{ひら}ら山^{やま}続^{つづ}き 古^こ城^{じやう}の奥^{おく}の裏^{うら}手^てなり
- 足柄町 八三 足^{あし}を早^{あしがらちよう}めて足柄町^{とよ} 樋^{した}の下^でには出^でずにして 農^{のうぎ}業^{よう}倉^{そう}庫^この前^すを過^{すぎ}ぎ 行^いく先^{さき}々^{ざき}は土^し族^{ぞく}地^ちよ
- 43 右^{みぎ}は大^{おお}平^{ひら}松^{まつ}ばやし 樋^{した}の下^でへは出^でずして 杉^{すぎ}の木^き立^たの切^{きり}り通^{とほし} 行^いく先^{さき}々^{ざき}は土^し族^{ぞく}地^ちよ
- 太鼓櫓・参の門・頌徳碑 八四 44 太鼓櫓^{たいこやぐら}も雲^{うん}煙^{がい}の 馬^ば場^ばの跡^{あと}なし汽^き車^{しや}の道^{みち} 沿^そふて来^{きた}れば参^{さん}の門^{もん} 左^{ひだり}にあるは頌^{しょう}徳^{とく}碑^ひ
- 一と本柳 八五 45 柳^{やなぎ}の下^{した}に苔^{こけ}むせる 石^{いし}は古^{いにし}へ秀^{ひでた}忠^{ただ}が 憩^{いこ}いし跡^{あと}の記^き念^{ねん}とて 今^{いま}に伝^{つた}へて残^{のこ}りたり

小諸の城・乙女坂 八六 小諸の城は天文の昔大井がいらみたる 要害堅固の乙女坂 二の丸臺は築かれぬ

御所平・酔月城 八七 古き館は御所平 後皆武田の手に入りて 其名も雅致の酔月は 山本・馬場の縄張りぞ

七曲輪 八八 時めく勇士の七曲輪 鍋蓋・鹿嶋・陵神や 耳取・柏木・森山に 尚宮嶋も加はれり

牧野侯之居城 八九 其後ここは牧野侯 世々の居城となせし跡 明治初年の廢藩に 樹木を植えて宮を建て

懷古園・天神・荒神 九〇 その古を忘れじと 懷古園とは称えらる 社は天神・荒神に藩主を合わせ祀りたり

46 懷古園は牧野侯 世々の居城の跡にして 社は天神荒神の 二神を合せ祀りたり

九一 47 雲か霞か將た雪か 園に満ちたる桜花 旧士はこれを断腸の花と昔を偲ぶらん

九二 園内何処も樹は多く 四季の眺めを備うれば 訪ね来る人の絶え間なく 旗亭旅館の設けあり

48 園内何処も樹は多く 四季の眺めを備ふれば 訪ね来る人の絶間なし ことをば出でて右に行く

不開門・富士見台 九三 去る大正の十二年 摂政殿下御台臨 不開門や富士見亭 谷を隔てし千曲川

天守台 九四 四方の景色を御眺望 この有難き記念よと 建てし石碑は天守台 万代までも伝ふらん

耳取町・中棚 九五 茲をば出でて右に行き 耳取町を通り越し くだれば仲棚鉦泉場 浴客昼夜群がり

49 耳取町の入口に 小諸義塾は建てられぬ 隣にならぶ学習舎 共に学びの園なるぞ

戻り橋・袴腰・五里淵 九六 向にかかる釣橋は 城に縁故の戻り橋 見上げる山は袴腰 下は五里淵水蒼く

50 南に下がりて新道を 行けば中棚鉦泉場 見上げる山は袴腰 下は五里淵水蒼し

千曲電気会社 九七 釣りする人の影も見え 夏の遊びは殊によし 川辺に集ふ人々は 千曲電機の工夫ぞや

九八 やがて工事の成る時は 電気の力何百里 飛んで我国工藝の 事業をさぞや助くらん

時雨坂・七軒町・避病院 九九 木立は傘の時雨坂 上れば高し七軒町 県下模範の名を得たる 伝染病院所在地よ

5 1 こゝをば後へひききかへし 木立は傘か時雨坂 上れば高し七軒町 しめ掛山は右にあり

馬場町・注連掛城 一〇〇 馬場町通り右手なる 注連掛城の其あとは 藩侯代々の墓所 訪ふものは松の風

5 2 藩侯代々の墓所 訪なふものは松の風 前に見ゆるは下河原 駒方坂は道けわし

鉄道隧道 一〇一 踵を後に廻らして 東に向かって二三町 汽車の下なる隧道は 松井川の水の上

停車場 一〇二 左に行きて又ひだり ここは賑ふ停車場 汽車の響き笛の聲 人の乗り降り忙しや

5 3 馬場町通り出てくれば こゝは賑ふ停車場 車の響き笛の聲 人の乗り下りいと繁く

一〇三 これより十と九哩 小海駅への鉄道は南北佐久の連鎖線 私設会社の経営ぞ

富士見町・東信濃糸社・倉庫 一〇四 北の通りは富士見町 東信濃糸の会社あり 商業倉庫は其ならば 小諸倉庫はこの南

運送店 一〇五 運送店は数個所に 高く樹てたる旗印 共に競ふてつとむれば 貨物の運搬いと早し

5 4 通運会社や中牛馬 高く樹てたる旗印 共に競うて戦はず 貨物の運搬いと忙し

鹿嶋神社 一〇六 鹿嶋神社は尊くも 武御雷の命をば 齋き祀れる郷社なり 城の鎮めの古き宮

5 5 踏み切り行きて筒井町 倉庫会社は北にあり 五軒町をば右にして 鹿嶋神社の前に出づ

登記所・電燈会社・中信銀行・庶民銀行 一〇七 相生町に打出でて 登る左は登記所 電燈会社も並びあり 中信銀行庶民行

56 武御雷の命をば 斉き祀れる郷社なり 右に輝く白壁は 登記役場の建物ぞ

小諸小学校 一〇八 通り過ごして振り返へり 友に遅れそ松井川 橋の東の建築は 町立小諸小学校

58 友なおくれば松井川 橋を渡れば袋町 小山の如き建築は 町立小諸小学校

一〇九 59 教えの庭に生ひ志げる 貳千有余の撫子は 朝よりとくに愛らしく 咲ける 妻げやな

小諸児童図書館 一一〇 我等の常に親しめる 小諸、児童の図書館は 此の校の舎内に設け置かれたり

小諸郵便局 一一一 隣にあるは郵便局 人の出入りの繁くして 電信電話絶え間なく 通信事務こそ劇しけれ

袋町 一一二 この下なる袋町 繭糸会社や乾燥場 製糸工場 再繰所 付属倉庫も連なり

純水館 一一三 純水館は煙突の 上る煙と名も高く 製造年額数百万 海外までも知られたり

60 この前なる製糸場 純水館は煙突の 上る煙と名も高く 海外までも聞こえたり

一一四 61 これにて町を一めぐり済ませば 暫し傍らの芝生に憩いこの土地の 主なる産物教えみん

主なる産物 一一五 62 繭に生糸に織物に 氷豆腐に寒露梅 その名も薫る松茸や 世に名も高き信濃蕎麦

一一六 63 豆類麦類酒醤油 味噌に素麺干うどん 川魚類は鮎と鯉 鮎とかじかの 数々ぞ

商業地 一一七 64 人数と戸数は誇らねど 誇るは名高き商業地 奮ひはげみて此町の 繁華を共に謀るべし

一一八 65 折しも春の夕日影 散りくる花を照すなり いざ分かれんよ友どちよ いざ帰らん吾家に